俳諧一葉集

後編

一

俳諧一葉集紀行之部

古学庵佛子 編
幻窓湖中 校
坎窩久臧 校

甲子紀行 又称野曝紀行

旁叶ふ不二ともんぬるそ世一ゐんき
何ゝしゐ里と云けるハ世ゝひそのいなけゝゐて業ゐゝ
ゐきとつくし侍ゝ堂ゝ真逆のおゝいゝ深く朋友ゝ信ゝ弥
世人

源川や芝崎を不二ゝはつけゐく　ゐ里

不盡川のおとゝをゆくゝゝ三はゝゝ桂ゝのゐゝれけゝ
佐あゝ此川のゐ激ゝかけて浮世の波をきのくにゐゝ家
ゝゝゝ此家まゐ宮と桂宣けんゐ萩ゝゝの秋のゐゝゝひ
やちゝふんゐゝやきゝんと被ゝゝひ物ゐけて通ゝ
桂をゐの人桂ゝ秋のゐゝゐ
いのゝゝゐ海父ゝ悟れゝゝ母ゝゝれゝゝ父ハ海を悟
むゝゐゝし母ハ海ゝゝゝゐれたゝして海ゝ性れ

ゝけゝふゐをなけ
大井川をゝゝゐられ神ゐゝ
秋のゐれ面江戸ゝゆひゐん大井川　ゐ里
ゐ上の吟
色の色此本桂ハゐゝ桂ゝれゝゝ
世ゐゐゝ宮の月かゝゝゝゝ山の根深いゝゝゐゝゐゝ
敷をゝれゝ数里いゝゝ敷ゐゝ杜牧ゝ早行の詩景小松の
中山ゐて忘ゝく
ゝゝゝ
杉紫屋風湯ゝ伊勢ゝけゝゝゝゝ身者一業の桂
宮是ゝゝゝ玉鉾宮ゝ寸陰を帯ゝ桂ゝ一囊をゝゐて
ゐゝ十八の珠をゐけゐふ侍ゝ似ゝ者ゝゝ侍ゝ以ゝ数ふし

我僧にあらずといへども浮屠の属にたぐへて
神前に入事をゆるさず暮て外宮に詣侍りけるに一の
鳥居の陰ほのくらく御燈処々に見えてまた上も
なき峯の松風身にしむ計ふかき心をおこして

三十日月なし千とせの杉を抱嵐

西行谷の麓に流あり女どもの芋洗ふを見るに

芋洗ふ女西行ならば歌よまむ

其日のかへさある茶店に立寄けるにてふといひける女あが名
に発句せよと云て白き絹出しけるに書付侍る

蘭の香や蝶の翅にたき物す

閑人の茅舎をとひて

蔦植て竹四五本のあらし哉

長月の初故郷に帰りて北堂の萱草も霜枯果て今は
跡だになし何事も昔に替りてはらからの鬢白く眉皺寄
て只命有てとのみ云て言葉はなきに兄の守袋をほど
きて母の白髪おがめよ浦島の子が玉手箱汝が眉もや
や老たりとしばらくなきて

手にとらば消ん涙ぞあつき秋の霜

大和の国に行脚して葛下の郡竹の内と云処は彼ちりが
旧里なれば日ごろとゞまりて足を休む

綿弓や琵琶になぐさむ竹の奥

二上山当麻寺に詣でて庭上の松を見るに凡千とせも
経たるならむ大いさ牛をかくすとも云べけむかれ非情といへ
ども仏縁にひかれて斧斤の罪をまぬかれたるぞ幸にして

尊し

僧朝かほいく死かへる法の松

ひとり芳野のおくにたどりけるにまことに山深く白雲
峯に重り烟雨谷を埋て山賤の家ところ〳〵にちいさく西
に木を伐音東にひゞき院々の鐘の声は心の底にこたふ
昔より此山に入て世をわすれたる人のおほくは詩にのかれ
哥にかくるいでや唐土の廬山といはんもまたむべならずや
ある坊に一夜をかりて

砧打て我にきかせよや坊が妻

西上人の草の庵の跡は奥の院より右の方二丁ばかりわけ
入ほど柴人のかよふ道のみわづかに有てさがしき谷を隔
たるいとたふとしかのとく〳〵の清水は昔にかはらずと見えて
今もとく〳〵と雫落ける

露とく〳〵こゝろみに浮世すゝがばや

もしこれ扶桑に伯夷あらば必口をすゝがんもし是許由に
告ば耳をあらはむ山をのぼり坂を下るに秋の日既に斜なれば
名ある処々見残して先後醍醐帝の御陵をおがむ

御廟年経て忍ぶは何をしのぶ草

大和より山城を経て近江路に入て美濃に至るいます山中を
過て古常盤の塚有伊勢の守武が云ける義朝殿に
似たる秋風とはいづれの所か似たりけん我も又

義朝の心に似たり秋の風

不破

秋風や藪も畠も不破の関

大塩平八郎の乱に際八木因幡守殿を
討ねらひしを心得違ひて拾ひ
取りきたり如何のそなへ紙のとれ
家名断絶なり
牡丹
牡丹はよろよろ咲きよろ咲きけり
その枝に扇使ひ
ひけばのやきしく奥白ふる一寸
遊廓の妓院大門
かくこの一言を強く張り小社の行きとまりこに居とさ
てそれとその蓮きのふ心のやうに生きうるものしう
めしなるもむ心ぢうる
きのふ
きのふく餅うやうれ

名護屋城に入る
牡丹
牡丹花はしらの如く
芍薬
芍薬はうよりれ
市人よこの笠
旅人を見る
うるさくふるむつ
海老
海老のうりうりうしく
海苔
海苔は野の
うるる
海苔雑
海苔はかの
海苔
海苔は枝を折る
海苔
海苔はけれ
手
手はれ

[illegible]

二月末の頃

水取やみの[illegible]

高く上る三井秋風の写風の山寺を訪

梅林

うぐひす白しきのふやゆきをぬきもれし

梅の本の花ちかからぬすがうれ

伊豆西岸寺任口上人の庵

秀衡ぬ桃の赤きよ

大佛の毛山法をこそ

山法華句やうすすき孔雀

[illegible]

[illegible]の杉を

[illegible]の[illegible]ひとて松原を[illegible]

[illegible]しいけく千鶴さく女

吟行

業平[illegible]

水[illegible]世事を[illegible]古人千年

命[illegible]の中[illegible]

伊豆西岸寺の[illegible]

[illegible]

ひまをうけれハ

いとゝさそ稚麦うゝん　そ　祝

代信寿そ生て言葉寿の大頭和尚てゝむ月の時　笑

迷花しゝゆゝまとゝ和官の四絶きゝてにまりをとう

世角奇人ゝつゝのハしゝ

梅　名く　卯のもをこのむあゝゝれ

鶯杜宝

白けしゝ明ゝく　陸れかゝゝ　卯

二ゝひ相楽ゝ海そ海ゝ　ゝゝ和寺寿ゝゝんゝまゝ

牡丹葉涼くゝけ　めゝ　陸れ　ゝ

甲斐の山中ゝ立ゝゝく

ゆく　弱ゝ麦そふくゝむゝゝゝゝふ

卯月の末尾そ海ゝ梅の芳とゝゝ月ゝに

ゝ　ゝ　いゝゝゝゝゝみを　ゝ重ゝます

廉斎紀行

後の夏宝暦の頃の月夜

松うけや月を三日敷井納を

ときけん雅文のもうしきもあり。きさらぎ秋かしらの山の月夜と思ひ立ちて、ゆく仕丁人やとり信濃の士ひとり一人小まくやの信ことかしすのこと有る事の有りて三月の望を終り新うけ出山寺の像を廚子ゆゑ入こしろ立ひ

松敷引ちらし〻〻門の羅もさいつものかくはあつちて

鶯新〻てむぬとひくく仏ゆまあらん仏ゆまあらん乱

はつ月をかくふうのちくまくめくく門より

舟をのこけ地とくまをはつれいこまものらん

羽經のちうをにめさんとあちこゆく甲斐ふよう

成人のこまをしるひの朱もしけくれる笠をかのしいこうき

ちくひくやくとこ里をこれいかりの谷をひろむ

野ゆう峯回の一本里とうの和田をくこ尺こうこ筋波

山むうふをくこ峰ふひこうかの立ちよ改制のこひゆ

ゆ〻〻八尾山の一陽ちう

やうをりまきけむりのつくれ

と後〻八条門人尾やうの白ふまくこ山八ゆ武尾ふと

はをけくくこ連ふすうの人のをゆふ仏ゆうの者ふ

八こうこうひゆなくいこくこれまくこれ山のをこ

ちうこうし最ゆ谷をけをこ芳仲ゆ長樋ゆ

杉入こ杉の谷ゆこ杉ゆ流ゆくこうひきちこの

中郎ふかゆ尾古みゆ小男麻の谷ゆ

ひいとあはれなり野の駒ところえかほにむれありく又あはれなり
日既に暮かゝる程に利根川のほとりふさといふ所に
つく此川にて鮭の網代といふものをたくみて武江の
市にひさくもの有よひのほと其漁家に入てやすらふ
よるのやとなまくさし月くまなくはれけるまゝに夜舟
さしくたして鹿島に至るひるより雨しきりにふりて月見る
へくもあらすふもとに根本寺のさきの和尚今は世をのかれて
此所におはしけるといふを聞て尋入てふしぬすこふる
人をして深省を発せしむと吟しけむしはらく清浄の
心をうるに似たり暁の空いさゝかはれ間ありけるを和尚起し
驚し侍れは人々起出ぬ月の光雨の音たゝあはれなる
けしきのみむねにみちていふへきことの葉もなし

月見に来たるかひなきこそほいなきわさなれかの何かしの
女すら時鳥の哥えよまてかへりわつらひしも我ために
はよき荷擔の人ならんかし

をりをりにかはらぬ空の月かけも
ちゝのなかめは雲のまにまに　和尚

月はやし梢は雨を持なから　桃青

寺にねてまことかほなる月見哉　〃

雨にねて竹起かへる月見かな　曽良

月さひし堂の軒端の雨しつく　宗波

神前

此松の実はえせし代や神の秋　桃青

ぬくとくや石のおもしの苔の露　宗波
紅葉ちりかゝるあの音　屑良

田家

かりうけし田面の鶴や里の秋　桃青
稲田うるに赤やとそれん里は有　宗波
畑のすや稲すりうみを有をうる　桃青
芋の葉や有やの里は焼さるけ　〃

野

まくひなや一花すゝれ萩こゝろと　屑良
七の秋ゆくゝ咲るこうまゝ　〃
萩ゆゑや一花ハやとも山のぬし　桃青
時雨自準之介　〃

埋もよるゝ千石舟友　先　松江
秋をゝめふるくわのさし故　桃青
有尺ゝ沙ひふの行る舟ゝ　屑良

貞享丁卯仲秋末五日

卯辰紀行　又稱芽野紀行

百餘九竅の中より物のかくれなく見分けて風雨霜雪をも保つ
ものゝ如くなれども世とやすらふんとしぬるわびしかれ牡
丹を愛して久しく絶て生涯のなぐさみとなす病みて
使て放擲きんとすれども捨がたく
なくなる非相中を作るなり
為をなすべきもこれなく
是を更をさまさん事を思へども
事能無義にして出一筋にはなれうる所行の和合をおもふ
家産の進退をかけて唐舟の修をおける利休を学ぶ
今世を生るものハ一生の風雅をおもひ造化を

としごろ旧友祝誄門人に至るハ詩歌文章をもて訪ひ或ハ
香雑の料を包みて志をとゞけしかの三月の猿をとひむかひ
一茶が力を入れし残花集子なとゝもの帳子志にしたかふれ
物心に結びつゝもひて雲にやすみの菅をいふにさへ心外し
或ハ小乗をとらしめおのれに没し其後ハ風雅にたつさへ来て
ゆく處を祝し名残を惜み外とすることあたはゞ人只
其年を過すまでも似かうといと艶めかしく覚えさけれ
そもし其の作とえものは紀も長吹阿佛の尼の文をとふ
ひ情を書きてより餘ハこれ俳仙うまのひて世糟粕を以
らむ心となりなまし。諸鍾才の筆を尽すべく
かのほか其縁者よりそれぞれに松かふかしらす
何とこ川かのれさこれとえてもられぬとこえく覚待れとも

芳蘇新のならひ好みハ云ねども今のかれされども香をそへて
おのれ風流心に耽りし山鉄恕亭の芳しき結も且ハ幹の節々
あり風やあのならひ自らも思ひ余りてまかぬ祭ししれや
先やと云集め作る祝詞のもの掃除をしひとしくいはゞ
人の譲をなすもあらひて尺余りて人なきて能をよ

鳴海子とかくして

星崎のやみを見よとや啼千鳥

我ら丹雅亭云の昔をまもりかあらたきめひさ訪ひてきくとある
みちとくみけき海を中に庭るそしと詠しものゝある
をこゝろかりをもひて結びけるしをかなさ

京までハまだ半空や雪の雲

みちのくの保了みとろ宿に杜国の思ひなつかしてをと訪

んと先越人ニ消息して鳴海より跡さまに二十五里尋
かへりて其夜吉田ニ泊る

寒けれど二人寝る夜ぞたのもしき

あまつ縄手田の中ニ細道ありて海より吹上る風いと寒
き所なり

冬の日や馬上ニ氷る影法師

保美村より伊良古崎へ一里ばかりも有べし三河の国の地
つゞきにて伊勢とは海へだてたる所なれども いかなる
故にか万葉集にハ伊勢の名所の内に撰入られたり此洲崎
にて碁石を拾ふ世にいらご白といふとかや骨山と云ハ
鷹を打処なり南の海のはてにて鷹のはじめて渡る
所といへりいらご鷹など歌にもよめりけりとおもへば

猶あはれなる折ふし

鷹ひとつ見付てうれしいらご崎

熱田御修覆

磨なほす鏡も清し雪の花

蓬左の人々にむかひとられてしばらく休息する程

箱根こす人も有らし今朝の雪

ある人の会

ためつけて雪見にまかる紙衣哉

いざ行む雪見にころぶ所まで

ある人興行

香を探る梅に蔵見る軒端哉

此間美濃大垣岐阜のすきものとぶらひ来りて歌仙あるは一折

なと陸奥の沙弥さすらへ侍りし護峰山の麓に田里を入んとす
旅わすれさすらへ来ぬれハとうらふの里をたづねてこゝに杖をとゞめ
素盞尊もこゝに来ぬれハ
坂のもとに行路おのづからこゝに義ぬ
かちうちハ杖つき坂をこえてこゝに
と物うさの餘りに伝れとも孫と雪の間入て
古さとや稲の孫子に法とゝめられ
雪の手ぬの名誉をしるまんと酒飲和尚のすゝめ文を宿とす
往れハ
二月十七日
紅葉
まちをさくやる
れなれ山ぬ山うれ

枯葉や海へ吹寄る一二寸
法華寺の法師なる上人の旧跡なる護峰山新大
佛寺とゝやを造りこゝ人を業のかさしとなりて伽藍ハ絶
さ礎を踏一切尽ハ苔の生ぬ
苔のみとゝる埋れさるみくしのゝ祝殿ハ
千年人の法新いまゝ金くねく千代の石
ゆうゝふ雨れく流ゝはゝ石の苔墓物
の中れと八菩薩の上に堅く文林の枯ゝ法ゝものゝ
ゝゝゝわれゝゝれけも
文ゝ法
石の上
鶴の嘶ゝの庵ゝ
さハしの事ゝ

伊勢山田

何の木の花とはしらす匂ひ哉

裸にハまたきさらきの嵐哉

菩提山

此山のかなしさ告よ野老掘

龍尚舎

物の名をまつとふ荻のわか葉哉

網代民部雪堂に会

梅の木に猶やとり木や梅の花

草庵会

芋植て門ハ葎のわか葉哉

神垣のうちに梅一木もなしいかに故ある事にやと神

司なとに尋侍れハ只何とはなしおのつから梅一もともなくて
子良の館のうしろに一もと侍るよしをかたりつたふ

おこらこの一もとゆかし梅の花

神垣やおもひもかけす涅槃像

やよひ半過る程そゝろにうき立心の花の我を導
く枝折となりて吉野の花におもひ立んとするにかの
いらこ崎にてちきり置し人の伊勢にて出むかひ
旅寝のあはれをも見且ハ我為に童子となりて道の
たよりにもならんと自万菊丸と名をいふまことに
わらへらしき名のさまいと興ありいてや門出のたはふ
れ事せんと笠のうちに落書す

乾坤無住同行二人

よし野にて桜見せうぞ檜木笠
よし野にて我も見せうぞ檜木笠　万菊丸

旅の具多きハ道のさはりなりと物みな払ひ捨たれどもよるの料にと紙衣ひとつ合羽やうの物硯筆紙薬等昼笥なと物に包て後に背負たれハいとゞ臑よわく力なき身の跡ざまにひかふるやうにて道猶すゝまずたゞ物うき事のみ多し

草臥て宿かる比や藤の花

はつ瀬

春の夜や籠人ゆかし堂の隅

足駄はく僧も見えたり花の雨　万菊

葛城山

猶見たし花に明行神の顔

三輪　多武峰　臍峠　多武峰より龍門へ越る道也

雲雀より空にやすらふ峠哉

龍門

龍門の花や上戸の土産にせん

酒のみに語らんかゝる滝の花

西河

ほろほろと山吹ちるか滝の音

蜻螟が滝

布留の滝ハ布留の宮より二十五丁山の奥也
布引の滝　津の国幾田の川上に有
大和箕面滝　勝尾寺へ越る道に有

桜

桜がりきどくや日々に五里六里

[illegible]

扇[illegible] 風[illegible]うけや 黄昏くら

昔清水

[illegible]の木[illegible]は[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

言葉

父母は[illegible]

[illegible]

[illegible]

和歌

[illegible]の[illegible]追[illegible]

紀三井寺

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人[illegible]とかくらんとおもふ又これ旅のひとつなり

更衣

ひとつ枝さくらしろるゆひぬきとく

よ[illegible]おさ布を[illegible]ちろさこう　万葉

[illegible]佛のなハ[illegible]

[illegible]世[illegible]おいてきこの[illegible]

[illegible]仏のなり　生絹なふ[illegible]

[illegible]提寺[illegible]和尚[illegible]の[illegible]船中七十餘度の[illegible]

[illegible]月の中[illegible]入て[illegible]眼[illegible]

[illegible]の祭[illegible]月の[illegible]

四友[illegible]

[illegible]の角より一[illegible]

大坂[illegible]人の[illegible]

[illegible]　松のひとつなり

次ア

月ハ[illegible]

月[illegible]

[illegible]月中[illegible]次ア[illegible]

[illegible]山ハ[illegible]

[illegible]海の[illegible]

麦の穂なミあからみあひて漁人の軒ちかきけしの花のた
えゝに見わたさる

海士の顔まつ見らるゝやけしの花

東須磨西須磨濱須磨と三所にわかれてあなかちに何わさ
するとも見えす藻塩たれつゝなと歌にもきこえ侍るも今ハ
かゝるわさするなとも見えすきすこといふ魚を網して真砂
の上に干ちらしけるを烏の飛来りてつかみ去る是を
にくみて弓をもておとすそ海士のわさとも見えす若し
古戦場の名残をとゝめてかゝる事をなすにやといとゝ罪
深く猶昔の恋しきまゝに鉄拐か峯にのほらんとする導
きする子のくるしかりてとかくいひまきらハすをさまさまにすかし
て麓の茶店にて物くらハすへきなといひてわ

かれハ十六といひけん里の童子よりハ四つ
ハかりも弟なるへきを数百丈の先達として羊腸険岨の
岩根をはひのほれハすへり落ぬへきことあまたゝひなりけるを
つゝし根笹にとりつき息をきらし汗をひたして漸雲
門に入こそ心許なき導師の力なりけらし

須磨の海士の矢先に鳴やほとゝきす

ほとゝきす消行方や嶋ひとつ

須磨寺やふかぬ笛きく木下闇

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

かゝる所の秋なりけりとかや此浦の実ハ秋をむねとするなるへし
かなしさ淋しさいはんかたなく秋なりせハいさゝか

心のはしをもいひ出べきものをと思ふぞ我心匠の拙きをしら
ぬに似たり淡路島手にとるやうに見えてすま明石の海右左
にわかる呉楚東南の詠もかゝる所にや物しれる人の
見侍らばさまざまの境にも思ひなぞらふるべし又うしろ
の方に山を隔て田井の畑といふ所松風村雨の古里といへり
尾上つゞき丹波路へかよふ道あり鉢伏のぞき逆落など
おそろしき名のみ残て鐘掛松より見下すに一の谷内裏屋しき
目の下に見ゆ其代のみだれ其時のさはぎさながら心に
うかび俤につどひて二位の尼君皇子を抱奉り
女院の御裳に御足もたれ船屋形にまろび入せ給ふ
御有さま内侍局女嬬曹子のたぐひさまざまの御調度もて
あつかひ琵琶琴なんどしとね蒲団にくるみて船中になげ

入供御はこぼれてうろくづの餌となり櫛笥はみだれて海士
の捨草となりつゝ千歳のかなしび此浦にとゞまり素波の
音にさへ愁多く侍るぞや

更科紀行

さらしなの里姨捨山の月見ん事しきりにすゝむる秋風の心に吹さはぎてともに風雲の情を狂すもの又ひとり越人と云木曽路は山深く道さがしく旅ねの力も心もとなしと荷兮子が奴僕をして送らす各こゝろざし尽すといへども駅旅の事心得ぬさまにてともにおぼつかなく物事のしどろにあとさきなるも中々におかしき事のみ多し何々といふ所にて六十斗の道心の僧おもしろげもおかしげもあらずたゞむつむつとしたるが腰たはむまで物負ひ息はせはしく足はきざむやうにあゆみ来れるを伴ひける人のあはれがりておのおの肩にかけたる物どもかの僧のおひねものと一ッにからみて馬に付て我を其上にのす高山奇峰頭の上におほひかさなりて左りは大河ながれ岸下の千尋のおもひをなし尺地もたいらかならざれば鞍の上しづかならず只あやうきわづらひのみやむ時なし棧はし寝覚など過て猿が馬場立峠などは四十八曲りとかや九折重りて雲路にたどる心ちせらるかちよりゆくものさへめくるめき魂しぼみて足さだまらざりけるにかのつれたる奴僕はいとおそるゝけしきみえず馬の上にてたゞねぶりにねぶりて落ぬべきことあまたゝびなりけるをあとより見あげてあやうき事かぎりなし仏の御心に衆生のうき世を見給ふもかゝる事にやと無常迅速のいそがはしさも我身にかへり見られてあはの鳴戸は波風もなかりけり夜は草の枕を求めて昼のうち思ひまうけたるけしき結び捨たる発句など矢立取出て灯の下に

同じくら秋をあまたてらめさかをハかの是心の行旅情の心
うくさ無ひすうやと推量しあ秋を唐人ふうまつ
あるめくうるやのうるの数を寒しかのうのやしと
思ひしるるの物作くるて昭情のさけうと未さ初き
うもることもきんとてくやまれる月影の強れう
本宮かくるき入くるき引板のうあかふ秋しうし
けるやうに少しき秋のうるうるこ寒もういてい月の
ひうと酒ふまんとやへハ重持むさうのつ月と一めうの
大きうるさあつうかの前強をしうう秋の人ハ行うのハ
風情れうくまるさうのかうるうやうけめ無さへう
清流玉底のハ秋きうしもあるのうし

行はやうと前稿 高井 月

うけうやハのうちうるむ苔ようつ
かけはしやより物ハいむ初むうしひ
空かうれう桜ハ目ふううがは 越人
峠行山ハ情ようしう一里ようう南ようう横ようれて
すさやうくうくるはうふかとしくしうう完れうとうし
只はうん海ふ山のすううれうなくうくうくういうきんと
よううきうれうてうるうう越きうの自ふのむうる人う
行うんと思ふうう海ふ着うひうれハ
俳や峠ひうう位 月の友
更科やこううの文科の歌うう
ひううしと行 月見やよ行 越人

ゆきみさく大根かしら秋の風
木曽の稼うき世の人はち度うきま
ぶつぶつおろう仕そ木曽の秋

善光寺

月影や四門四宗も見ひらく
吹底まで天地開闢ふるれ

おくのほそ道

月日は百代の過客にして行かふ年も又旅人なり舟の上に
生涯をうかべ馬の口とらえて老を迎ふるものは日々旅にして
旅を住とすむかし人も多く旅に死せるあり予もいつれの
年よりか片雲の風に誘はれて漂白の思ひやみがたく海浜に
さすらへ去る年の秋江上の破屋に蜘の古巣をはらひてやすら
くれまた春立る霞の空に白川の関こえんと そゾろ神の
物につきて心を狂はせ道祖神のまねきあひて取もの
手につかず股引の破れを繕ひ笠の緒付かへさて三里に灸
すうるより松島の月まづこころかゝる所八人ゆづる庵
風うつる草の戸も住かはるよ代ひなの家

四八月を境の樹子にうけ置やあひと事共なるかの古歌に
とゝく月八重なる雲をさしそへてさきまれるものゝ不二のうゝかす
うゝ尺〻と上野信中の郡の稽古いかとしもの
ましきかもゝ八重ゝ青ゝ作ゝかゝ弁ゝけゝさ送ゝまゝしゝゆゝと
うゝきゝうゝ海ゝとゝかゝれ八重ゝ八重ゝ色ゝ三ゝ里ゝのゝ花ゝ絵ゝ手ゝ書ゝうゝて句ゝの
やゝに鶯ゝの涙ゝをゝそゝゝく

ゆくまゝやゝうゝ春ゝ一魚ゝ目ゝ玉ゝ

うゝれゝと矢ゝ立ゝけゝくゝ一ゝめゝとゝしゝくゝゆゝく春ゝすゝゝ八ゝ人ゝ八ゝ
中ゝゝゝ

[illegible]
竟門の乞食所れてとくの人をたすけるのふすま
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]山おくゆかしけしきこそ[illegible]おくゆかしく侍き
[illegible]卯月の天と称さて十余丈の木株を伐て山門八
さしかの行をいくの[illegible]ゆと[illegible]の山よりの[illegible]八石上社
小院岩窟と称ひけり[illegible]所[illegible]の石室を
尺[illegible]

木曾ゝ院を[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

四位八方の山際一里半ばかりに飯塚の里鍋野と云ひ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

のわれハ加上川南方ハ大河し石川ハ和泉ハ珠をめく
てて方領のこゝ大河ハ義人康衡ハ四方ハ石ハ岸を隔て
南方ハとさしてハ夷を防くとへしゝもも義をすく
まゝ此城を築り功名一時の業むゝとなる國破れて山河ハ
城春にして草木ゝとなりと冠ハ雪おもくして冑を
義し作るぬ

なるや 作くものゝ ゝもゝ つゝのはと

うの毛 うれ 曾良

かねて耳聞しる二毒ハ所すゝ經まて三將の像を拭し
先ハて三代の栄を偲め三ゝ堂ハ金色すゝ七宝おくを
て珠の扉風を破れ金の柱ハ月ハ明て既ゝ秋風ハ吉
の義とかゝくもゝ四面ハゝ夢を殘て風雪を

三のゝ形毋主宗の法命ゝ多れゝ

きみ ゝれ 深 ゝ ゝ や 光 孝

南方ハ是ゝゝゝ見やゝゝ岩くゝの里ゝ海ゝ小ゝ島ゝ磯ゝゝの小島
をゝゝゝゝゝることの海ゝ風ゝの岸ゝゝゝて出羽ゝゝらゝん
とゝ此法拙人ゝれゝゝ愛なれハ岸ゝゝ乃やゝゝめゝゝて海
ゝゝゝ寄をゝゝ大山をゝの海ゝて日既ゝ暮けゝハ對人の家
を見うけゝ今ゝをゝゝゝむ三ゝ風雨ゝれゝゝ家ゝ岸ゝ宿ゝ

曽 ゝゝゝみ ゝゝ 風すゝ 松 もと

海ゝゝのゝゝれゝゝ出羽ゝ大山ゝ海ゝゝゝゝなゝゝれハ
是ゝゝゝの人ゝゝ行のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ人ゝ
ゝのゝ付れハ寛文の昔ゝの反脈ゝを樹ゝ松の杖ゝ撫て
家ゝゝ先ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かゝる所を過ひをれ　さゝ[illegible]
さる山森ゝとして一さる奏[illegible]
くらゝ[illegible]　[illegible]
[illegible]
かの東[illegible]
[illegible]
尾花澤[illegible]
志[illegible]
[illegible]

涼しさや[illegible]
[illegible]

[illegible]を伴[illegible]
[illegible]　旬すゝ人ハ古代のすゝ[illegible]　[illegible]
山形領[illegible]
清閑の地[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

八月廿五日出る本宿を発し引き続き窓冠を踏てみ
ち力なくもものうそひとれくもの中を水をこと踏て
出るとし八里更手の日行道の平岩を入るとはやーまれ
息絶なんとえて頂上に猪れハなほ月はるる垂を数
落と枕とーと仰るこるかるに待ちむて西に消れハ海岸の
谷のかくるに銀沢小屋とうるとはの頂峰雲水をえるに
下らに隠斎ーさく剣をうの孫月山と称をきりて
寄手に尝とるかの鶴泉に剣を洗とやに千将莫耶れ
芳をとるとるを芭を惜能の執ハ洗ふぬとしーれ芳手後
うけるとけ体ーふ形とーふ三尺とるの桜の清わしまん
ひるるかる降後ものこの手ハるとまるれぬ垂桜の
花めるるるるの炎天の極れるる笠るるーー行手信

正の高ハ行くかるとるる手四方ひむる野まるて芳の鶴高式
山中の風面行者の法式とーー伝えるるとる梅ます仍て
芳とるるるるて祝るる
鶴れハ海宝鏡の雲を伝る三山明れの白く経冊を
深ーとやかの三日月ハ羽黒山
月の峰いるる
かるれぬ須屋をめるす紙うれ
須屋山鶴ふるるそはふるるる
羽黒をるる野宮ハ嫌い出山弐重行とるるものるふはるる
むるるるるる紀詩一巻るるるる左手ハるる道るぬ川舟るる
酒田のみなるるるる風庵不耳るる醫師の法るるるます
月ハるる山や吹海うるけるるみすみ

美濃より海を入て入江もとみ川

江山水陸の風光爽を尽す象潟と方寸をあ海田の
境う東北の方山をうしろ西を海を隔て千隙十
里の新風かくしく清涼吉物を吹上雨機能とし
て海の山かくさ閑寂を英作て面と又奇なりとも八面
海の景色まさ新月とともの月色を入て両の海
をもつて新天とくそなれくなるさしもの海と
象潟の舟をうしのふ先能因島を舟をして三千世居
の海を詩ひむしの月の舟をはうれいの花の上こくを後
き一樹の老木西行法師の記念を残す江上の陵ゆう
神社庁宮の跡を尋て古寺を千満瑞を三代物を行幸
ゆうしを所をいとくしかの寺の方丈つ中に

宮殿を構へ八景一眼の中に尽て南に海を隔てさしえ共
かけうつして江に浮ゆう動ハむやしの等閑をかなう東に堤
を築く秋田に通かよふ道なりて海水に浸て浪打入る
象潟をはうとを江の眺横に連はうう俳枕島をかすめて
又とあり松しハ八景中とくく象潟をうむとをさひ
き半ひをうとをくく地の魂をあわやまを仰ら
きうとや雨に西能うあふの花
ゆうしや郭種めれて海すし
象記
象潟や雨に西施が合歓の花　曽良
みのゝ国の人
ねむの木の葉や戸板を敷て客をまち　芭蕉

若上の雅楽の音をうつす

波うつ音ぞうつりてみさごなる　曾良

酒田の湊より北へ三里あまり海上を行に象潟の海
鉾をいれたるがごとし東西より山を入て海を抱
て湖水をなす八十八潟九十九島ともいふべしと
ぞ寄る波かたぶけば西にかたむき東の岸に
寄る波西にかたむく

文月や六日も星の光あらば　芭蕉

象潟や雨に西施がねむの花　芭蕉

能因島　蜑の小舟こぎつれ漁する海人の
笠か波に浮て流るるかと疑はる

干潟に船を横たへて一宿す翌
朝の景色又たとへんかたなし

こゝに来て美人西施を思ひ寄せ
ば恥ずかしきがごとし
眉を顰て愁ひを含む
がごとし
笑て口を開くがごとし
行て船に乗ればまた
興あり
島々の形象
鶴の翼を広げたるが
如き
鶴の首
鶴の足
鶴の羽
鶴の尾
鶴の巣
鶴の子
鶴の子
鶴の子

一夜子逝女と和歌と　月

曾良とかれハ七里ばかり西四十八ヶ瀬ゝ

越川をゝしてゝ新庄ゝ

ゝも初秋の云ゝふべきものをと人千賀れハゝれハゝ五里

徐つゝひしてむかふの山岸に入ゆくのゆかりなれハ

笠の一枚の布ゝすものゆゝ手しといひおとされくかぶ笠に入

ゝをのゝもやゝけ入ゆゝて三千餘　海

卯の花山ゝ

大坂ゝ

一家ゝ

ゝ

ゝ

むさんやれかふるのこゝはきりくに

山中の温泉をゆくとて

山陽を経て奥州に入る道なり北山法皇三十三所の順礼堂さまをもひて

作大慈大悲の像を安置し敬信をあつめて和尚

谷組の家をこうら作りとゝ高石をたゝして古松松をうゑ

苔むしたるの小屋岩の上を造りうけて珠数の志ばし

石山寺

ふるうきしの石ゝ

温泉を浴せんとて

秋の風

山中や菊はたをるぬ湯のうちひ

ゆくしとするものハ久米之助とかれる父帰依を

五位の貞室五位堂のむうこに来りて秋風を

うたゝく湯の門人と共に寄る功名の松に

一村家毎の料を請ずして文むしかりうく来ぬ

曽良ハ病を病て伊勢に行

ゆきくれて木の葉かくしの宿かな　曽良

とゝ三里ゝ行ものゝ半ハ以前ゆくみ雙亮のうれて

ものゝ中ゝ行

ものゝうゝや寺付　けさん　のゝ家

大聖寺城主の城下なる泊る所加賀の地に曽良ハ

の松ゝ

秋風や　秋風

とゝ殺生一枚の陶を里ゝ同じ秋風を

以ハ加賀の国を浅野侯の領地に

平入ゝ城主ゝ心早率ゝ来ゝ下ゝ

仏ゝも残炬をうえ階のもとまねひまつ打ち庭中は
梅ちれハ

庭掃ゝ　ちりや寺子ちり　梅

えぬ〳〵ぬさ月ゝ　ゝ字雑ゝ　雑ゝ　雑ゝ　雑ゝ　境吉崎の入口
を舟ゝ　掉さして　汐越の松を見る　波

松ゝ　ゝ　波ゝ　ゝ　ゝ　

なりぬ　[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]

古學庵佛兮
幻窓湖中 編
坎窩久藏 校

稲芝蓋特

[illegible]

[illegible]

[illegible]

みちけくのり柳をひきてくを伐既に彼あんとすれハ
かれハまうちの塗を地をうくてゆらちちく人しる雲のあを
ひ風のかうひ外をくるしものみあををはられを筆お
すきひうる書詩し拾をひくうにあくをやを老を旅
南のをくのひにをまう人しのうをを我の彼波一うをあを
うひをを孫を三ををの書秋ををを一をふをひを蓬を
流をををくをを立角のあをはをちをれのみをひも
ををうを竜をうをれハ人しのちをうもをのをかをうを伐
はのうをを立をを言をうをを三間の茅屋法をを
をを秋の粧いををけを割れ一竹の枝折戸やをうをの
を流をつを志をを南をもをひ他を昭を水樓を知を
世ハ不二子者を宗門帝をを知を浙江は物

三ををの流をかをを角ををたをををををれハ和角
れをををををををひ雨をををし牛后角のをををひを
し先生蓋ををつをを宗法一を彩をおをををを
我ハ半吹をれを風鳥の屋をいをを青扇破れを風
をを外一寺ハ凡し花咲をををををを豊姫ををれを
も斧ををををひかの山外不材の数本をにくを千持を
俗恢素ハ是を年ををくをしをを紙模渠ハ新我をを
を海学ををををををを学世ををををを
ひをけを逝ひを風雨をやをれ為をを

宗門雑一　洛ををぶし神の又し

世手を秋かをを人をかおををををを五角の初め

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]の海[illegible]
[illegible]人の[illegible]
[illegible]舟の中[illegible]
[illegible]
[illegible]

烏賊

一烏小大乃ことなりとなれども共に小を烏鶴といひ大を翁といふ
とらへけるを反哺の義をもつて僕しを乎中の夢をもつて成ハ
人家をゆく人をつけ振舞を翁と二星の類と
なれども成ハ大事のやうにおもはれてきたるをもつて
らくもとしてをもつてゆくみちのあるをもつてかへ
ゆくなんとして詩歌の才をもつて情をもつていひ作をもつて
かくもつてをもつて只食物の中をいはんや性大し又油を乾を
うるをもつて好をもつて小しても害をもつて大し能中かの翁をハ
性偽張をもつて能をもつて翁の翅をもつてかれをもつて翁の爪のもつて
をおそれて肉ハ鴨肉の味をもつてあるハ食をもつのみをもつて

嘴叶を人不可の音をもつて地をもつて鳴をもつて出事をもつて出いて鳴を
むをもつて黒をもつて八重鶴の精をもつて同形をもつて同相
をもつて鶴をもつて幸者の労をもつて成ハ春のかひをもつて
うるのの誠をもつて人の戸をもつて生をもつの待をもつて
て孫をもついのけ者をもつのちをもつのもつて鶴の古代をもつてのもつ
ものをもつて俗一色をもつて乳ハもつてもつて大をもつて女房をもつて
きをもつのもつて油をもつて大をもつて心貪欲をもつてかをもつて
俗をもつて人をもつて受俗をもつて釈氏をもつて情をもつて俗を
も甚をもつてむをもつて俗油をもつて俗をもつて俗をもつて
三星の金烏の成をもつめんをもつて

笠張説

[illegible]

[illegible]

[illegible]

情をうしなふまじきことはなれてゆくまゝにぬけく
人生七十をまれなりとかゝるをのさうなるとそ
二十四五にしけるの老れまれなる一枚の書をとり五十
年六十年の齢をかくまでかくまれて有物
すらをねんのかなかの何てをとのむさふつ
是ものゝ八百ふをおぼえ灯燈皆長しを一夜すくて
まれく是非のすくるものしらねをもて古のいとれみを
ゆるを余所の廣界をうるを怒一溝洫をおもれ生す
をゆるをうをも南蕃光仏の只利害を破却し光若を
をもれし閑をうん去れものしみをいふくりん
人まれ八世間の俗ゆをもて八仏の教をさをうをもも
し号敬を戸を宇て杜之郎門を強んを友をを

友をし爲を家ををしてを年春の行文をつををみつを
禁戒ををを

新ををいや爲をを強ねるを門の辺

仏家歌集序

尾陽蓮左樞木雲を人仏号を集をゆみて名をゆを
ゆをを名仏ゆをを式名ゆをををををををををををを
やをを一をををををををををををををををををを
ゆをををいを世を新あををををを又ををををを
やきをををきやををの言を極楽の月をををゆをを縁
ををのゆのをををををををををををををををを風情をををををを
をのをゆれをを和歌を逝のをををををををのゆををををを

[illegible]

銀河序

加賀之国白山御一宮社頭の大杉[illegible]
休渡り西に海の西十八里塗渡を隔て東西三十五里之
横たへり中に海の嶮難[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

水のほとりよりはるかに[illegible]
きれるまゝ[illegible]の秋いまゝにあて行かの[illegible]白
川の秋風よりかの宮義の[illegible]をゆてゝ[illegible]
ふるてゝかゝはせ[illegible]
おくるゝひてゝ[illegible]
三ゝひとみて世[illegible]
[illegible]

所ひとのゝ[illegible]れさひとの秋の[illegible]

義宝跋

[illegible]
一句ゝいふ[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

處栗集跋

栗てよ二葉共味ひなし
李杜の心ばせをあらそひて寒山の粥をすすることなりけり
共句々くはしてきくに
後とは風雅のその生子ゆゑ
ひろ[illegible]栗や
志の情つくしてもむかし
かぶき上陽人の宮の中まで衣桁さすのかりまくし

下の弟子湖こうの歌を聞こうの歌を
ゆかりのふしぎの火影黄の花穴のゆかりをひ
仮宅をやつして和心を
共話雲飛雨
泉よ文字を冷ふ見花の
なのめまひとを待

閑居箴

ゆく[illegible]の菊やうちの人の仕事をうらやく人
もちろん人をうらやとゆるうちふれ
有の秋をのゆくのと友の言ふうちふれ
をとをいとひとを海のうちかくれ

初しぐれてをとをとあらぬ人又をとをとあれてをとをとあらぬ人
をとをとあらぬ柏をとをとあらぬ柏の葉や
海の色ハいとゝわるひとゝの色

自得箴

もゝふとゝとゝひとゝふをとゝとゝひ飢寒をとゝとゝ其の
身を

免をとゝとゝ人の為をとゝ入ん事の為

机銘

閑をとゝ机を付をとゝけて嗟雪吹雪の事をやしをとゝふ
閑をとゝ机を付を事を知を学才の技術を拙

鄙ふをとゝ事をとゝて義事の方すを入をとゝ知をとゝ
ゆをとゝき一世の三用をとゝ事をとゝく事を八寸おもて二尺あ術を
ゆ免をとゝ二の割を鄙をとゝて潔能牝るの臭をとゝ為
をとゝれをとゝけをとゝ一用をとゝんや又二用をとゝんや

恵の葉を弟　元孫仲を芭蕉書

庚右銘

人の為をとゝいをとゝ私の為を為をとゝ
張四
ものいへハ唇さむし　秋の風

孤之銘

山素堂

一瓢重黛山　自笑籬邊山
莫愁首陽餓　這中飯顆山

[illegible]

きりくさんとさうりむすしき守そらしてのをとなれそう対
無一重くこ重をいくそて袋山とのろくとんてをうろ
知ひとつ瓢ハうろおそうの吉うれ

栖去家

こてのしてうれのうふて栖所といふ所ハ花して
むりきさしふくをうあ風物をしわ見ものをして
ものをんとれハ風情猶中をさうひて物のちゆめくや風
雅の慶心ふるんし家をを放ハして栖をきう猶ゝ百物
をたくさんて柱杖一鉢ゝ命をむすふなしをう風情
歌をとをかふんとを

鄙言　自詠

おもふてもふつのけさ手結ハ谷の松とあるふなるらく
毛ーーく

ゆくさこそ我ハはうてかゆ人うる人ちとなれまろ

喪亡人文

大和国長尾の里といふもさハさきよりて幸さきゆふく山里
ーーく山ーとにゆふくゆふ心あるさうし老ら母のおて
ーくるくをくかるのこくくさつひ色おとる本そのおこしけ
ものくし敷をて岩尾めつくるくすとれーまつく枝をくん
石をく捧てハ竜茅の角とくなるあいく宝ようてんくと
元母をつくくをくくへれくき寅ゆくくあまーく

ーくを春をゆくくくくくしてゆくれまつーくくーて春
をを尚くす古人とかくををくをくをくれんいくく
をくーくくあ　和やゆまくを言ゆくれ

吊秋七夕雨星文

元秋六文有古の歌風や天をくち白浪弘法の筆をい
くくーてくを尚散く橋杭をふをーー一紫桃を吹杉奇き
二星をを風をくくーくくひ彩さにくをん踏
おくーくと一紙をうくけくく杉くく遍照小町の歌を吹
すくくくまくれくくくくて牛二星を指くて雨星のくくく
をくくくくくんくくす　小をくくくくの
言葉をゆくくくくくくと紙おや岩の上

通明うしう
七夕かさねハうと結合羽　松風

雲竹讃

[illegible]の素門寺外[illegible]
[illegible]むしくはしぬを垂てこれを[illegible]
実ハ六十年ハ[illegible]
一[illegible]
[illegible]
こたへむけ[illegible]秋の雲

杉苔賛

此苔のなりたち名付るものは上つ[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

四あしらう月千人ゆるものこれ深し

弐会記

[illegible]

幻住庵記

石山のおく岩ぶかしこの山ふかき山ふかしこのこのこの

孫氏の尊像とあがめ崇て甚いちじるしく霊験あらたなる
やうなれば利益の高きをおもひ又あるいは
人の信をうるべいとて神さびたる物をかくしにすみ
おくに常の人ならぬ雅松姫がをかくれ給ひ
粧雅ふしとなるべきうらなひ信仰のいとなる
勇士蒼海が妻翠子の伯父なるもんぜうしを今八とくなう
むかうに来りおきて幻住人の名をのみ聞きうるまき
市中さまざまに十とせ住うかねて五十年中ちかきあた
みの中のうのをとしをかれて異相奈海
はあるをもて面を蓋し言葉ひめ聞きおかれの海の波よ
踏を破りてしかの海の波よりあるの海岸のあるのれと
やうに人ぞ蓋の一ちのうけるのをもて祈願をかけるのをもとめ

ねがひをとなへ祈をとなへ祈りの中に入て出やうとおも
しをとなへおりひをとなへぬさきをうたがひをとなへ
吹ぬ山奥おもてうらうて部をたづねるとあるの分の
あるようさくはをとなへ木陰のつくるをいとくるをとなへ
無しをとなへひ異楚東南の方角洞庭
の山八朱中をたづねる人をよるをたづねるを南蓋
ようおろしかの海を浸して深しの枝の山岳のをわかる
かるものおろかなるみをえて塔を搭りて舟を
笠取をかるを木蓋の高く替の小間の高を高くの新浦を飛
うふをやみのをくをの鏡のをくをして美家物をして美
すをいふをれ中をを三上山八士崎の仏をかうひてむさ
殿の吉をすをるをおりひをれ田上山を古人をかをつき

[illegible]

[illegible]

[illegible]

玄の龍子入んとをもふ風やうを分とさめ物
子猶を学して生涯のたうとさ人のみを八稼を
学能を考オうして此一すらをつかる楽天八五稼の神をや
ふる光村を授ら望恵文殿のひとしうをもいつをうの
けすみるをくやおもひ物をみぬ
まいるむ物の本をはる文本之

西首坐汇

山を勢すして性をやしなひ水八物を情をなくさむ勢
歌二の言ふしまを仕者をえるものの宜四を取りをとう
同子住境を愛して四を風物を明を濁をすべ蓮を
ゆ〻ふ所西首坐をよる同子戒情をみて分おの門四

子入てをゆるふをもふ加空線ら家をを四るされ孫子
一暑をくをくをおう且をれ宮をし方丈かるの二万休沼二をの
流をつをさを言をを手のをを沼本を極原をををくをかるけを四
ををれををををもをしたるの海八者四風宮をを左出の神のをく
しゆを抱を三上山子もの山を設をのかをちを仰をれ八松の
ひをき波を山をふひをの山ひをの言ねををを尺を尺を貴四石
山を肩のゆををををれん者けを出宮をの花を出をかをして猿
山を月ををを山清水流清のををを出をかをして猿
をを又をれををふをれをし
四方より花吹入子修の湖

成多ら庭上の松を伊矢ら詞

[illegible]

元禄四年仲秋日

文屋合之歌

嗟歳日記

元禄四年辛未卯月十八日嗟歳を過ひて十市の貴柿屋を訪る九兆
[illegible]
きよし陸奥つくり義経の屋敷の[illegible]
仰ぎ[illegible]
参詣物語　源氏物語　机一　硯　文庫　白氏文集　本紙一人一首
[illegible]
[illegible]
[illegible]
十九日半陸川寺に詣つ大井川あるれて[illegible]山右に[illegible]

社尾の里を過けり高き人ゆきうひおぼし杉の尾林
の中に小稚屋しきといふ所にて止りの時雨に三所ばかり
わらしらみんかの仲間の詞をかくしてもの弱なる物をも
式ばかりなれハ志をくくられるるくるくるく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

千年ぬれぬ袖千年の後紅葉を見て宗波

[illegible]

[illegible]小猪[illegible]

又云

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

物皆の[illegible]

[illegible]

[illegible]

廿三日

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

枝阪今夫赤帆卯　青葉く阪堪等書

白小督墳

強撹恩情出源言　一輪秋月野村根

背季俗行歌琴韵　何変孤墳竹樹中　文草

芳野より二葉を義さ桜の実

道中の吟

ほとゝきす鳴くや桜さくら　史邦

黄山谷を感句

杜門覓句陳参己　對窓揮毫素少游

乙州来て武江の吟并賀五分の俳諧一巻共中子

半俗の雪屑を入れ子を後子

白井峠を下て　こ紀　貫角

稿の賛　狂ひ　月

雅ふり俗人ふ　ふ

宇治の山女子　わる

いつくを失　ゆる　堪　忍

中の刻ゝ　霜　電降　雷降

大寺ふ加　秋の　ちひさ　八星霜の

廿六日

芳野より二葉を志ける桜の実　文草

くるけの実を　芭蕉

桜生ものし　古素

人のうもうち　文草

ゆるん　乙州

三月廿二

廿七日 人事に孤なる行李
廿八日 [illegible]杜[illegible]を[illegible]ひむかひて[illegible]を見る心事おもし
[illegible]対八[illegible]を[illegible]ゆめ〳〵陽[illegible]ろ〳〵[illegible]水を[illegible]
[illegible]ゆえ〳〵[illegible]を[illegible]対八[illegible]多をゆえ〳〵[illegible]を[illegible]
対する蛇を[illegible]〳〵[illegible]腸枕[illegible]根安玉の莊周[illegible]
[illegible]を[illegible]を[illegible]を[illegible]八[illegible]人[illegible]
[illegible]想[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

廿九日 [illegible]館の[illegible]を見る
高館 [illegible] 天[illegible]仏[illegible] 衣川 通[illegible]月[illegible]
[illegible]の[illegible]
廿日 [illegible]
江州来[illegible]の[illegible]寺李白[illegible]尚白[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

大峰やとりけつて入ハ天の原

[illegible]

[illegible]

[illegible]

文ゝ子頃者ゝ石山上

猪風信子節

風信ハ花子頃ゝ梅子頃ゝ桜子頃ゝ藤子頃ゝ躑躅子頃ゝ杜若子頃ゝ
此天数の礼ゝよく調ゝて言高角徴羽の五音に

白髮吟

白髮ゝ文月の玉ゝつゝ武陵ゝ古里ゝ頃ゝ二十ゝ七の
月ゝ七ゝ日ゝ夕ゝれゝ小ゝ雨ゝの降ゝ音ゝ聞ゝて
ゝ七ゝ夕ゝのゝ心ゝ伝ゝ思ゝ和ゝ歌ゝ
ゝ万ゝ葉ゝ集ゝ伝ゝ
ゝ人ゝの歌ゝ
ゝ

よ海ゝ山ゝ
ゝ
ゝ

案言

代ゝの
ゝ
ゝ
ゝ

[illegible]

更科姨捨月ノ歌

[illegible]

義をもること[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

田中一平分[illegible]あれかが賀[illegible]引こ[illegible]
人も[illegible]ハかの[illegible]所名中れ新[illegible]
[illegible]人を以ハ[illegible]
[illegible]れハ[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]ハ
五月十八日ハ[illegible]の講習[illegible]かの中
[illegible]人ハ[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

裏仏不害と称

蝶蝶説

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三井寺の門にて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ゝ獨ゝの俳むくゝ紙ゝの穴ゝをゝ名ゝてゝうゝの舞の名ゝてゝうゝと
うゝんゝねゝさゝの八人員ゝさゝのゝひゝとゝゝゝゝゝぶゝんゝむゝゝ陶茶ゝゝゝ舟ゝ
のゝをゝてゝゝゝゝゝ